

第三章「人文」では、集落・産業・交通・開発をとりあげた。集落については土地利用、形態、立地と水利、起源、機能について調査した。産業は農業・漁業が中心で、工場は少なく小規模である。商業もあまりさかんではない。この地域は琵琶湖の最狭部にあたるため昔から交通の要地であったが、明治以後湖東に比べて交通の便があまりよくなかった。しかし昭和39年に琵琶湖大橋が完成し、昭和49年には湖西線が開通し交通の便がよくなった。そのため、宅地開発・観光開発が最近急速にすすみ、京阪神のベッドタウンおよび観光レクリエーション地域となりつつある。

第四章「水産業」では、水産業の現状、堅田漁村の変遷をとりあげた。堅田の湖岸には現在なお専業漁業者が存在し、漁業活動はさかんである。漁獲高は滋賀県下第二位で、市場は京都・大阪が中心である。淡水真珠の養殖もさかんに行なわれている。

第五章「西南岸地域の地域性」では、地域内6地区の各々の特色および地域全体の地域性について考察した。丘陵部では農家が7割以上を占め、農村的であるが、湖岸では宅地開発がめざましい。地域性に大きく影響を与えてきた要因は、琵琶湖の湖岸に立地していること、琵琶湖の最狭部に立地していること、沖積低地が狭く滋賀丘陵が湖岸にせまっていること、大津に近いこと、京都に近いことなどがあげられるが、京都に近いことがなかでも最も大きく影響を与えてきたと考えられる。京都へは現在も魚貝類・材木・切花・生乳などが出荷されており、京都への通勤者も多い。

伝統産業「川連漆器」における地域性の研究

山口 真帆子

伝統産業「川連漆器」の成立要因の中において、自然条件と人文事象のかかわり方を地理学的に考察することと、その漆器業によりいかなる地域性が編み出されているかを考察することが私の卒論で目指したことであった。

まず第一章において、川連の在る横手地域を自然・人文の面から概観した。そして、第二章では私の卒論のテーマの第一番目―地理学における自然条件と人文事象のかかわり方を、漆器業の成立から発展過程を追い、5つの項目から考察した。

漆器業成立の際、自然条件としての湿気が川連の立地を左右するほどの決定的条件とは言い得ないが、「漆器＝Japan」と言われているように湿潤な気候下に在る日本全体が漆器に必要な湿気状態に適し、それにより湿気はやはり漆塗りに必要な要因と言えるのではないだろうか。

原材料の得やすさという点では、川連は、大変有利な状態にあったし、又現在もあると言える。なお、有力な自然条件として付け加えられるものに、地元、奥山からの原木運搬に利用された皆瀬川の水連がある。

次に人文条件として挙げられるものに経済的必要性（田地不足と高い租税からくる農民の貧困さ）があった。このことは内職的に作られていた漆器が産業として確立するに至った最も強い要素と思われる。そしてその後の発展に寄与したものとして佐竹藩の援助と地元地主達の投資が挙げられる。後者は資本家として貧農層をガッチリ支配し、その後、現在までも多大な影響力を持っている。

第三章では川連漆器そのものを様々な角度から眺め考察した。農村工業として育ってきた川連漆器であるゆえ、その特徴も優美と言うより堅牢である。この堅牢さを作り出している「地塗り」は川連独特の下地法である。

第二番目のテーマ漆器業によりいかなる地域性が編み出されているかといったことを第四章で考察した。私としては第二章を基盤として地域性を描写したかったのだが、結局、農業との関連、生産構造による地域社会、さらに近年導入された仏壇業による変化・影響、この3つから川連の地域性を描くことになってしまった。結論として、川連塗りは農村工業として成長してきて現在も半農半工という性格を強く持ち続けていること、江戸時代からの生産機構があまり変化しておらず、又、農村的事業であることにもより地域が保守的であること、偶然的に導入された仏壇業により川連は現在かなり潤っており、漆器・仏壇とが併存し、将来もおそらく並行していくであろう、だが両者ともこれから一層の研究・開発が必要である、ということが言える。

山梨県南巨摩郡中富町の集落立地

山 本 和 子

中富町は、背後に南アルプスをひかえ、目前には富士川、さらにその向こうには富士山を望むという、一見申し分のない自然環境の中にある。しかし、反面、その自然のために、災害をはじめとし、数々の不利益をこうむる運命にあるといえる。そこで、本論文では、自然環境が人間生活の上にとどのような形であらわれるかを明らかにするため、主に地形・地質の点から、集落立地について、及び集落の農業土地利用について考察することにした。

調査地域の産業別人口構成は、第一次産業 38.9%、第二次産業 30.5%、第三次産業 30.6%、というようになっている。^{*}第二次産業は近年の工場誘致の結果として、増加傾向にあるが、中富町は、ほぼ第一次産業に依存した町であると言ってよい。

中富町の集落は、農業集落カードによると、28集落あり、各々の集落はほぼ完全に独立し、地形・日照・日射等に関するそれぞれの自然的立地条件を反映し立地していると考えられる。また、当然のことながら、交通のような人文条件も立地条件にあげられよう。

論文の方針としては、まず地形面の分類を行い、集落がどの地形面にのるかを見てみた。分類された地形面のうち、集落（この場合、耕地は含まない）ののる地形面は、山稜緩斜面・山腹緩斜面・山麓緩斜面・上位段丘面・下位段丘面等の平坦な地形面であった。特に山稜緩斜面・下位段丘面に立地する集落が多い。ここで、中富町の地形概観を明らかにしておく必要がある。中富町の西半は山地地域で、山稜緩斜面は、この地域の標高700m程の所に連らなる。東半は、富士川に沿った低地地域で、下位段丘面は、この地域に集中する。国道52号線がこの地域を富士川に沿って走り、このことから、集落の規模の点では、下位段丘に立地する集落の方が大きいと言える。

次に、地形面と農業土地利用について考察した。農業土地利用は、集落別作物結合型、及び、水田率・畑地率・樹園地率で代表させた。一般的にいって、下位段丘面では、稲作が多く、その他の山間